

史料

江戸時代の道路を往く (一)

路邊から展望せる江戸時代の姿相

渡部 英三郎



— 本 號 目 次 —

- 一、はしがき
- 二、道路を往く人々の群
 - ◎ 參觀交代旅行
 - ◎ 商人の旅
 - ◎ 村落の姿相、特に商業の發達（商人の旅行との聯關に於いて）

一、はしがき

映畫の時代劇などで徳川時代の道路交通の面影を取扱つた場面等を見る者は、たとへそれが甚しく事實をゆがめ、または誇張されたものであつても、尙そこに、この後期封建社會が有つ世相の縮圖を見出すであらう。

何時の時代でも路邊一帯には時代の文化が、一の零圍氣を成して色濃くにじみ出し、そしていろいろの形で浮動してゐる。その邊りに展開する種々の現象や事物は何れも時代の面影の反映であり、時代の姿相を窺視すべき一つの窓

でもある。例へば路上を去來往還するいろとりくみの旅人等の姿は、その時代の社會構成の様相を反映し、沿道に展開する村落や宿場の情景は社會發展の過程を示唆するであらう。また例へば森の影や臺地の上などに隠見する、他の建築物との比較に於いて、目立つて高莊な寺院の堂塔は宗教が占めてゐた社會的地位を示し、路邊の隨所に散見する民衆信仰の對象（庚申塚、道祖神等々）は文明的評價に依る、宗教發達の程度を物語るであらう。これ等は一、二の例示に過ぎないが、その他道邊に、現出する事々物々は凡て何れも時代の姿相の反映であり、時代の文化がその上に印刻されてゐる。

本稿が企圖する所は斯うした視角から、道路を中心として若しくは路邊に足場を置いて江戸時代を特色附けてゐた社會の諸相を展望しようとするに在るが、然し假令道路若しくは路邊に觀察の立場を限るにしても、この時代の社會相を廣汎な、範圍に亘り、系統的に秩序立て、論述するが如きは、結極江戸時代の文化史を編むことであり、この小

稿の企て及ぶ所でない。此處ではたゞ路邊一帯に現はれて來る事に物々について懷古的に物語りを進めながら、それ等を透視することによつて、江戸時代の姿相の斷片を把握することを以つて満足しなればならない。またときには必ずしもそうした立場に立たず、たゞこの時代の交通現象のありしがまゝを紹介し、前稿「徳川時代の道路及道路附屬物史物語」への補足の意味のみを以つて筆を進める場面もあるであらう。

二、道路を往く人々の群

鐵道や軌道に依る交通機關が絶無であつた江戸時代に於いて、全ての陸上旅行者が道路によつて旅を續けるの外なかつたことはいふまでもなく、それが我々の想像以上に路上を混雜せしめ、賑はせる原因となつたのである。駕籠、馬、そして股引脚絆に振分荷物の旅姿、それ等が絡驛として續く、當時の主要街道の賑ひは、ながく今日我々が莫然と考へてゐるやうなものではなかつたらしい。

未だ「江戸時代」の初期に當り、後代の寛永、正保年間以後に於けるが如く、江戸を中心とする交通量が多くなかつた慶長年間頃でさへも、少くとも東海道の路上を旅行者が相當頻繁に往還したことは、

一の宮廷〔註〕江戸より他の宮廷〔註〕駿府は到り、駿河より都市〔註〕京都を指すに到るまで距離百レグワ〔註〕レグワ(里)を超ゆるに拘らず、無住の地は一レグワの四分の一もなく、通行者頭を擧ぐれば必ず人の往來を認むべし。⁽¹⁾

など、記する文献によつても窺はれるであらう。即ち當時に於いてさへも既に東海道沿線は著しき發展を遂げて人家が稠密し、路上人影を没する時がない程に、旅行者が頻繁に往來してゐたのである。

それから四、五十年後の元祿年間頃、既に江戸が尨大な有閑社會群を含む、政治的大消費都市となり、江戸を中心とする交通量が激増した時代に於いて、主要な幹線道路が殊に東海道が如何に多くの旅行者の群によつて盛況を極め

混雜を極めてゐたかはケンベエルが「江戸參府記」中に、此國の大街道は日毎に信ぜられぬ程多數の人々によつて埋められ、或季節には歐羅巴の住人豊富なる都會の市街よりも多くの人々に満てり。既に述べたる東海道は疑もなく七街道の最も主要なるものにして往來最も繁きものなるが、それは余が四度も經過して其經驗より斯如くなるを知るなり。⁽²⁾

と述べてゐるによつても其一斑が想像せられるであらう。この記述に多少旅行記に共通な誇張があるとしても、兎に角、道路上を群を成して往還來去せる旅行者の群を想見し得るであらう。

〔註〕(1)「ドンロドリゴ日本見聞録」

(2) 拙稿「江戸灣交通史物語」

(3)「ケンベエル江戸參府記」

また延享元年に參州岡崎宿を上下往還せる馬匹の數は二萬八千七百七十五(内上り一二、九六六匹下り一五、二〇九匹)に達し、寶曆四年に同宿を通過せる馬匹が二萬七千四百五

十四(内上り二一、七三七匹、下り一四、七一七匹)を算してゐるが、⁽¹⁾(これ等の問題については後)それ等の事實は大井川の河越人足が兩對岸の島田、金谷兩宿を併せ八百七八十人に達し、⁽²⁾兩宿男子人口の二割近を占めてゐた事實等と共に、江戸時代に於ける東海道の交通量を考へる上に、貴重な資料であることを失はないであらう。

「註」(1)和田篤憲氏「東海道岡崎驛の人馬繼立機構」——「道路の改良」第十五卷第二號、

(2)大島延次郎氏「大井川の渡渉論」——「社會經濟史學」第四卷第三號

そうした多くの旅行者の群は何れも「民間省要」の著者が、

四民共に行旅の事は故なくしてはする事なき物なり。士は君命に隨つて旅行し、農商工はそれ〴〵家職の爲、或は後世菩提に信を行じて國々を順禮修行する有り、餘情の人有りて慰み遊山の爲に旅行するは稀なり。⁽¹⁾

「註」(1)日本經濟大典第五、

と云つてゐるやうに、それ〴〵の目的を抱いて、これ等の街道を往還してゐたのである。先づ道を行く人々の群を通じて、それ等の人々を旅させた時代の姿と動きを見よう。

◎參觀交代旅行。

獨り東海道ばかりではなく江戸へ通ずる全国の主要街道は、寛永十二年、參觀交代制度の實施と共に急激に其交通量を加へて來たが、その最も主要な原因は、參觀交代に因る諸大名の江戸往還の旅行である。

この制度の實施以前に於いても、關原の役後江戸が政權の中心となつてからは、幕府への臣從誠忠を表すための諸大名の江戸往還は頻繁に行はれ、それがある程度まで定期的なものにさへなつてゐたかのやうに思はれるが、然し全國の諸侯が例外なく、必ず定期的に江戸と國元の間を往還することを餘儀なくされたのは、參觀交代制度が制定せられた以後のことに屬する。

「註」(1)「徳川時代の道路及道路附屬物史物語」——「道路の改良」第十六卷第十號、

(2) 「江戸灣交通史物語」——掛稿、

大小二百六十餘大名の江戸往還の旅行が江戸を中心とする諸街道の交通量を激増したことは

彼等（註「諸侯」）は旅行毎に廷臣全部を従ひ、自分も財産の許す限りを盡して人數多き、費多き行列をなし、威風堂々として練り行くを常とす……最も威望ある諸侯即ち諸大名は凡そ二萬の同勢と推せられ、小名の行列は其半將軍に直屬する都市の知事（註「奉行其の他の上層幕吏」）の行列は收入と位階によりて百人乃至數百人と推せらる。¹⁾

「註」(1) 「ケンペル 江戸參府記」

と記せる。外國人の誤謬多き記述などの中にも窺はれる。有力な諸大名の行列人員を二萬人、小大名のそれを一萬人と推算せるが如きは甚しい誤算若しくは誇張であるが、從臣群に、駄馬人夫等を加へた諸大名の行列が非常な多數に上り、行人を張目せしめた様子は、この記述によつても推察せられるし、またより正確さを有つと思はれる次の如き文献によつても知れるであらう。

長州侯の參觀交替には初めの頃は二千人三千人の大勢を率ひて往來したが後年にあつては其數を減じ一千人位とし軍隊行軍の形式を用ひ其旅行に要する費用は甚だ巨額に達するものであつた。⁽¹⁾

「註」(1) 瀧本博士「日本經濟史」

また遙か後代のことであるが嘉永年間に淀の城主稻葉氏（十萬二千石）が家臣百數十名と其從者を併せ總勢數百人から成る行列を整へて參觀交代の旅を江戸へ向つて續けたときの經費を記録せる「參府道中諸入費支拂帳」によれば箱根で臨時に雇つた人夫や提灯持ちなどのみでも二百四、五十人にも達したといふから、二、三千人の從者を率ひる大々名の行列旅行に於いては、それに相應する多數の臨時人夫なども行列に加つてゐたことであらうから、行列を形成する者の總人數は極めて多數に上つたものと考ふべきであらう。

「註」(1) 瀧本博士「同上書」所收

これによつても、前掲せる「ケンペル 江戸參府記」が

記述してあるやうな、當時の主要街道に於ける非常に多量の交通量は、その少からぬ部分が、諸大名の參觀交代往復の團體旅行に因ることが明かであつて、それは此時代に於ける數次に亘る道路網の整備工作や、宿驛制度渡渉制度等をはじめ、諸種の交通施設の發達に極めて重要な關係を有つものと考へられる。例へば元祿年間にケンペルが、

機會ある毎に本街道又は大街道を開き通し、これによりて全國の各地方に達するやうにし、此街道に添へる各州郡より個々の道路が此大道に集るは小川の大江に合する如くにして……⁽¹⁾

と言つてゐるやうな道路網の連絡整備の狀態等は、それが諸侯の江戸往還を唯一の目的として企圖せられたものではなくとも、少くともそれを重要な動機とせることは容易に推察せられるであらう。

此大街道は幅廣く二個の旅行隊が相互に妨げなく行き交ひ得べし。⁽²⁾
と記してあるやうな、主要道路の幅員の廣濶さ等も、それ

以前から萬一の急事に於ける軍隊行進の利便等を考慮に置いて工作せられた結果でもあらうが、その一般的な完成は參觀交代に因る諸侯の江戸往還旅行と密接な關係を有つものであり、民衆の旅行の利便と安全を主眼として成されたものと考ふべきではあるまい。

「註」(1)及(2)「ケンペル江戸參府記」

安永年間頃に於ける日本の道路交通の發達と、旅行の安易なる狀態に就いて、和蘭東印度商會の船醫ツンベルグが歐洲の如何なる國に於いても日本に於けるが如く愉快に且つ容易に旅行し得ることなきを斷言する。⁽¹⁾

と云つて褒めちぎつてゐるやうな道路及び其他の交通施設の發達や、また、

……秩序を保ち旅人間に喧嘩口論なからしめんためには首府（註：江戸）の方面に趣く者は道の右側を歩み、首府の方向より還る者は左側を歩くことを強制する規則を設くる位に深く注意を拂つてゐる

（も見出される）

（同じ記事はケンペルやシーボルトの旅行記中に

と述べてゐるやうな交通秩序の發達等は何れも恐らくは諸大名の行列旅行に其原因を求められるであらう。

「註」(1)及(2)「ツンベルグ日本紀行」

次にまた、ロシアの海軍々人であり同時に探險家であつたクルウゼンシュテルンが文政年間に、

また我等の驚歎に價した他の地方では丈高き樹の並木道が眼の届く限り岸に沿つて山と谷とを越えて延びてゐた。思ふにこの並木道は徒歩旅行者のためにつくられたのであらうが恐らくはその徒歩旅行者の休息のためと覚えしく、一定の距離に小屋の立つてゐるのが見えた。旅行者のため心遣ひの斯如くなるは異とすべきであらう。⁽¹⁾

と驚嘆し、また嘗つて前稿「徳川時代の道路及道路附屬物史物語」で述べたやうに、多くの外國旅行者の眼に、美しき風景、好ましき交通施設として映じた並木の施設や、それに對する注意深い保護等も、他の交通施設と同様に、諸大名の定期的團體旅行の行はれるに至つてからは、主とし

て大名若しくはこれに類する人々の利便と、慰安とを考慮に置いて施設せられたであらう。それが單なる無根據な憶測でないことは鋭い洞察力と綿密な注意力とを以つて江戸時代の日本を觀察したシーボルトが、

……されど日本國內の旅行を容易ならしめるに最も與力あるのは、各地の諸侯をして一年の半分は江戸に半分は本國に在らしめる政治的制度なり⁽²⁾

と記述してゐることになつても容易に肯かれるであらう。

「註」(1)「クルウゼンシュテルン日本紀行」

(2)「シーボルト江戸參府記」

要するに參觀交代制度の實施は斯如く、全國の主要道路に於ける交通量を急激に増加せしめ、この制度によつて強要せられた諸大名の行列旅行の必要は、道路及其他の交通施設の發達を促し、日本の道路交通發達史上一つの新时期を劃する重要な原因となつた。江戸時代を通じて行はれた道路の改良、交通諸制度の發達に關する努力は、主として、この封建貴族群の江戸往還の必要に動機するものであ

つて、後の時代に於いて見るやうに、産業經濟の發達を主眼とせるものでもなければ、民衆交通の利便を主眼とせられるものでもない。幕府の制定せる交通制度が諸大名の定期的團體旅行の利便のために、時には民衆の利害を犠牲に供することを願わないのはこれがために他ならないのである。殊に宿驛制度の如きは諸大名の江戸往來の場合に於ける地元農民の勞力負擔の義務を根幹とせるものであつて多數から成る彼等の行列旅行が、定郷助郷を含め、宿驛附近一圓の地方に苛重なる負擔を負はせることとなり、甚しく産業經濟を壓迫して地方を荒廢せしむる結果をさへ齎らしたことは後に宿驛に關して述べる所によつて明かであらう。それ等の交通施設並に交通行政の一斑を通じて、そこに封建社會の様相の一端が窺はれよう。

諸大名及それと同じ格式に於いてする人々の江戸往還の行列旅行が如何に封建社會の姿相をあるがまゝに反映し、嚴然たる諸般制度の面影を示現せるものであつたかは、文政年間に和蘭東印度商會總督(總督は略諸侯の格式に)の隨員(よつて江戸へ參府した)の隨員

として長崎江戸間を往來したフイツセルが、その行列旅行の有様につき、

路上の群衆は我等の過ぐるまで皆低頭し箒を持てる二人の者は行列の先頭に立ちて「下へ下へ」と叫びて我等の來れるを告知し、且つ些末の石片も塵芥も道路より取り除きたり。⁽¹⁾

と記し、またケンベエルが其旅行記に於いて、

道は箒を以つて掃き清め、市内村内にては塵のたゞぬために水を灌ぎ、騒ぎする賤しき人民、勞働者、疎慢なる傍觀人はみな遂ひ退け、路傍の家に住む者は奥に引き込み又は家の前に蓆を敷き、その後方に跪きて我等の通過するを沈黙靜肅にして見居たり。⁽²⁾

と記してゐることなどによつても一斑を窺はれるであらう。

「註」(1)「フイツセル江戸參府記」

(2)「ケンベエル同上書」

勢威と優越さとを、斯如き大袈裟な方法によつて誇示し

て堂々と練り進んだ諸侯の参観交代往還の旅行こそは、彼等が多くの家臣群と共に、強ひられてゐた江戸在任の浪費的生活と共に、彼等を財政的に疲弊衰弱せしめる原因となり、新興せる町人の財力に奇頼せずしては其生活を續け難き状態を招來し、やがて封建制度の基石を成す土地經濟自體の衰廢を誘導する結果となつたことは、眞に皮肉な現象と云はなければならぬ。

「附記」——大名の参観交代旅行の情景やそれにまつはる種々の挿話等については既に多くの文獻に紹介されてゐるから、それ等の事柄に就いては凡て記述を省略する。たゞ當時の最も重要な交通施設の一つである宿驛制度の發達はこの旅行と密接な關係を有つものであるから、後にそれに就いて述べる際に、附隨的にそうした物語に觸れることはあるであらう。

◎商人の旅

當時に於ける商人の旅は、大阪江戸に王侯の如くに存在せる豪商連の財力や、宿場は勿論農村部落にまで汎く浸潤

しつゝあつた貨幣經濟の發達を示す諸現象と共に、この時代に於いて日本の社會が辿りつゝあつた經濟發展の過程を物語る。

嘗つて本誌に於いて和田學士が「外人の江戸参府紀行に見る道路上の觀察若干」の題下に、江戸時代に於ける道路交通の頻繁であつた原因として(一)經濟交通(二)参観交代(三)宗教上の交通を擧げその中所謂經濟交通に就いて。

經濟交通についてシーボルトの云へる處は「活潑なる國內貿易の本場は大阪であつて國內の各地方より買手や賣手がこの大阪に向けて流るゝ如くに往來した」と。徳川時代に於いてはその中期以後貨幣經濟の發達と共に經濟は漸く、全國的に營まれ、當時の生産消費の二大都市、即ち大阪と江戸との間に經濟交通が頻繁となつた。而も大阪を中心として國內の各地方より商賣上の往來があつたことは又著明な事實であつた。

と述べられ、筆者と略同じ視角から、當時に於ける交通上の諸現象を、社會經濟發展の過程との聯關に於いて考察さ

れてゐるが、此處にはモウ少し立ち入つて、商人の姿相と農村に浸潤しつゝあつた貨幣經濟發達の面影とを眺めこの時代に於ける世相の動きを明かにしたい。

「註」(1)「道路の改良」第十五卷第三號

徳川時代の道路を往還した者は商用を帯びて旅路を急ぐ多くの商人に頻繁に行き合つたに相違ない。次に述べるやうな商業發達の情勢に於いては商品の仕入、行商、掛金の集金等の目的を以つて、旅になければならない商人が極めて多かつたものと考へなければならぬからである。然しそれにも拘らず、大名の旅行等に關する記述が多くの文献に見出されるに拘らず、商人の旅行に關する記述は、極めて稀有である。それは、つゝましき商人の旅行が、威風堂々とした大袈裟な大名旅行等の如く人々の注目を惹かなかつた事實に因ることはいふまでもないが、また同時に、過去に於いて、社會の事象を記述せる人々の態度が常に社會の表面に、華々しく盛り上つてゐる事物のみを觀察の對照として、その蔭に隱微の間に新らしき力として萌芽しつゝ

ある現象などには、あまり注意を拂はなかつた一般的傾向にも因るであらう。

都市に於ける商業の發達や路邊に於ける交通現象等につき可なり注意深く觀察せる前掲の外國人等の旅行記等にも、商人の旅行に就いて記述せるものは甚だ稀であつて、和田氏も引用されてゐるやうなシーボルトの記述などは、商業都市を中心とする商人群の頻繁な往來の面影を偲ぶに足る、貴重な資料であることを失はないであらう。然し近江商人や、伊勢商人の活潑なる活動などは、既に著聞せられてゐる所であり、また宿場々々に於ける商人宿の存在なども、當時既に商人の旅行が可なり一般的現象であつた事實を反映する。またこの時代に旅路に上る者にその出發前に、庄屋及五人組に一定の届出をなすべきことを命じた規定に

佛神詣、商買、何時によらず遠所へ参り候はゞ五人組並庄屋へ斷可²⁾參事、

と記してゐるなども、商人の旅行が一般的に頻繁に行はれ

てゐたことを窺ふべき一つの資料であり。

馬次の町にて奉行人は馬も人足も無滞、或は出家、町人百姓杯に暮れかゝりては一圓人馬を不出、若し出候得ば駄賃の外に馬差、馬士何かといひかけて錢をねだりその途遠ければ遠り候を氣遣して馬出かね大方其宿に逗留するなり。³⁾

と記して、民衆の旅に於ける困難の有様を述べてゐる記事中の「町人」も多くは商人であつたであらう。

註 (1) 竹越與三郎氏「日本經濟史」參照

(2) 及(3) 豊年稅書—貞享年間の著。

右に掲げたやうな断片的な記述のみによつても江戸時代の道路交通に於いて商人がその少からぬ部分を占めてゐた様子が窺はれるが、日本の經濟發達史上、土地經濟の時代として劃期せられてゐる當時の社會に於いて、斯様に多くの商人が、一般的に、街路を往還去來してゐた事實は、江戸時代が、殊にその中期以後に於いて、既に純粹の土地經濟時代から次の時代への推移過程にあり、商業—貨幣經

濟——が可なり一般的に發達してゐたことを物語るものでなければならぬ。

いふまでもなく商業の發達は都市を中心とするから、この時代に關しても商業發達の有様を知るには、先づ大都市を中心として話を進めなければならぬが、然し江戸大阪京都等の代表的大都市に於ける商賣繁昌、店舖櫛比の華やかな景況に就いては既に多くの著者によつて紹介されてゐるから、此處ではそれ等を繰返すことの煩を避けて、都市に關しては貨幣經濟の發達を表徴せる豪商の勢力が、當時の階級制度の下に於いても土地經濟の上に立つ諸大名を財力的に隨つてまた社會的に壓倒しつゝあつた事實を紹介することによつて商業資本、貨幣經濟の發達の一斑を知る上の資料とするに止めるであらう。

西三十三箇國の大名衆の御用を承り西國九州の諸大名は屋金しやく無きは一人もなしといへり。金錢の威力には諸大名よりの御附届、家老用人のれき／＼にも手を突かせ高位大祿の御方々共びざ組み合せてゐることもあり、

(天正間記)

これは大阪の豪商徒屋三郎右衛門の生活振りを叙した一節であるが、形式上の階級制度の下に於いては四民の最下位に在るものとせられた一商人でありながら、その財力に因る社會的勢力の強大さが諸大名をさへ壓倒してゐた様子が窺はれるであらう。また、

近來風儀悪しき諸侯の重役を見るに從者數十人召連れ、音物を重くし銀主に逢ふを王侯貴人の如くに存じ、其手代などの鼻息を伺ひて諛ひ笑ふの醜體實に悲しむべきにあまり……

と記せる「破れ家のつゞくり話」の記述や、

役人は心中無念ならめ、しかれども主君のためなれば町人の太鼓持ちをすることゝはなれり……。

と云つてゐる「松屋草記」の記事なども、何れも富力を擁せる町人の社會的勢力が治者群を形成する武士を壓倒しつゝあつた事實を反映するものであつて、財力の前に頭を垂れる武士等の悲喜劇を彷彿たらしめるものがある。斯如き

現象は純然たる土地經濟の社會に在つては勿論貨幣經濟の萌芽を藏せるに過ぎない社會に於いても有り得べからざる現象であつて、貨幣經濟が相當高度の發達を遂げ、都市に於ける其の尨大な集積が、強大なる社會的勢力を形成せる時代に於いてのみ現はれ得る事態である。斯うした斷片的記述によつても江戸時代、殊にその後半に於ける商業の發達が可なり顯著なものであつたことの一端を窺はれるであらう。

(紫浪)

魚籠空し梨なと買ふて戻りけり

高原の秋雪漬にこもる病詩人

橋杭の古さに虹や蓼の花